

97 大阪砲兵工廠化学分析場跡

- ▶ No.95で紹介しました「大阪砲兵工廠化学分析場」跡です。科学分析場の建物は、大正8年(1919)に建てられた左右対称のネオルネサンス風の赤レンガ2階建て、延べ面積は1887㎡で現在も残されています。著名な建築家、置塩(おしお)章氏の設計による重厚な建物で、ここで新兵器の開発・研究や化学実験などが行われていました。昭和62年(1987)まで自衛隊連絡部庁舎として使われていました。砲兵工廠の本館が無くなり、現在は砲兵工廠の遺構を伝える貴重な建物となっています。



大阪砲兵工廠科学分析場の守衛詰め所



大阪砲兵工廠科学分析場

98 京 橋

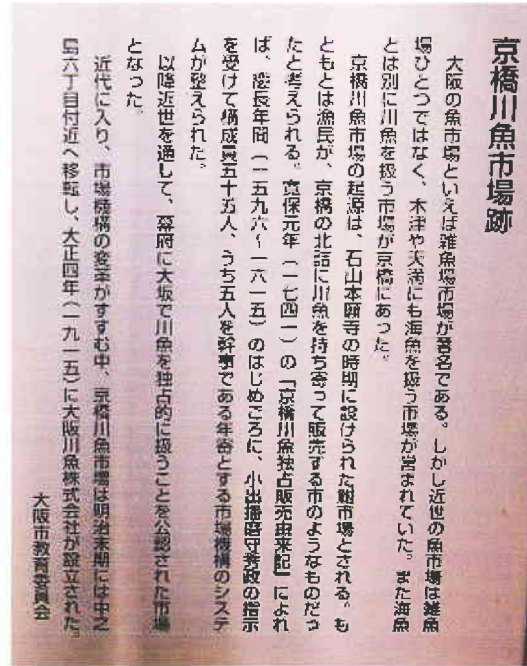
- ▶ 大坂城の北側の寝屋川に掛る小さな橋を「京橋」といいます。京街道の出発点となり、京都へ通じる橋という意味で「京橋」と名づけられました。



99 京橋川魚市場

大阪市都島区片町1

- 海魚とは別に川魚を扱う魚市場が京橋にありました。京橋川魚市場は、石山本願寺の頃よりあったとされます。



100 豊臣期大坂城三の丸の石垣/追手門学院小学校

大阪市中央区大手前1-3-20

- 豊臣秀吉は自ら死期が近いことを悟り、大坂城の三の丸の普請工事を命じます。そのときに使われた石垣が残っています。追手門学院小学校では、改築工事の際、地下から当時の石垣が発掘され、地下にある職員駐車場に見ることができます。(一般公開はされていません)しかし、一部は同校東門の前に移されたため、いつでも見られるようになっています。



追手門学院小学校東門付近にある豊臣期大坂城三の丸の石垣



追手門学院小学校地下(職員)駐車場にある豊臣期大坂城三の丸の石垣

<石垣の築き方>

- ①野面積み (のづらづみ) : 自然の石をほとんど加工せずに積み上げた石垣。7世紀後半に始まり、中世の石垣は野面中心であり、近世においても費用や工期の都合により採用されています。
- ②打ち込みはぎ : 石と石の接合面を打ち砕き、石垣の表に出る隙間を少なくしたものです。16世紀後半(桃山時代)から多用された積み方です。
- ③切り込みはぎ : 石と石の接合面を整形し隙間をなくしたもの。17世紀初期に登場し、現存する城はこの時期に多く作られ、この3種類の方法を併用しています。

豊臣期の大坂城は主に野面積みが行われ、徳川期の再築時には大半の城壁は打ち込みはぎ、角石や枡形の部分は切り込みはぎで造られました。現存の大坂城石垣には野面積みはまったく見られません。

101 徳川期大坂城の石垣/日本経済新聞社 大阪市中央区大手前1-1-1

- ここにある石垣は、昭和55年2月に行われた社屋建設工事の際、敷地内地下室から発見された石垣が移築されたものです。調査の結果、石材はすべて大阪城の現存する石垣と同じ花崗岩で、諸大名の家紋などを示す刻印も見つかっています。元和6年(1620)、大坂城再築時に城北の惣堀に見立てた旧大和川と淀川との合流点付近の旧大和川左岸の護岸用石垣として築かれたものです。



102 豊臣期大坂城三の丸の石垣/ドーンセンター

大阪市中央区大手前1-3-49

- ▶ ドーンセンター(大阪府立女性総合センター)にも豊臣期大坂城三の丸の石垣が見られます。
平成元年(1989)、ドーンセンターの建設に伴う発掘調査で、石垣が発見されました。
地下約2mのところ、東西21mにわたって発見され、これまで見つかった豊臣期の石垣の中では最も残存状態の良いものでした。



103 明治天皇駐蹕之所／大阪借行社

大阪市中央区大手前1-3-20

- ▶ 明治天皇が、明治20年(1887)2月15日、16日に行幸された際、行在所となりました。また明治31年(1898)11月18日、陸軍特別大演習終了後、文武官3千名を召されてこの地で御宴が催されています。
借行社とは陸軍将校の倶楽部(集会所)で、明治9年(1876)6月に設立し、当初は「博交社」と称していました。設立の主旨は、陸軍将校の親睦、教養、研鑽を目的とした勉強クラブでした。
明治15年(1882)、東京の借行社、仙台の一志社、熊本の有修社などと合併し、全国統一の組織名となり「大阪借行社」と改称されました。当初は各地を転々としていましたが明治20年(1887)1月に現在の場所に新社屋が建設され移りました。
昭和20年6月、大空襲により社屋は全焼し、終戦後、借行社は解散となりました。
跡地には現在、追手門学院大手前中・高等学校と小学校があり、中・高等学校の正門の門柱は大阪借行社当時のまま使用しており、小学校校舎には大阪借行社の玄関が残され、今でも使用されています。



大阪借行社の門柱(追手門学院大手前中・高等学校正門)